

近畿大学奈良キャンパスにおける山菜の生育状況

大伴 遥香・桜谷 保之

近畿大学農学部環境管理学科

Edible wild plants and mushrooms on the Nara Campus of Kinki University

Haruka OOTOMO and Yasuyuki SAKURATANI

Department of Environmental Management, Kinki University, Nakamachi, Nara, 631-8505, Japan

Synopsis

Edible wild plants and mushrooms were investigated on the Nara Campus of Kinki University which is located in the Yata Hills. Thirty three species of plants and 27 species of mushroom were reported with descriptions and color photographs. Most species of edible wild plants were growing at the edge of the forest and in the forest of coppice satoyama and some species were observed waterside such as pond or paddy field. Thus, edible wild plants and mushrooms were growing at various environments of the Campus with coppice. It is essential for sustainable cropping the edible wild plants and mushrooms to conserve the diversity of coppice. The season of cropping of these plants were spring and autumn when activity of humans in the field is high.

Keywords: Edible wild plants, Mushrooms, Satoyama

1. はじめに

里山では昔から、種々の植物が食糧として利用されてきた。これらの植物は山菜として、今日でも採取、利用されているが、現在ではむしろリクリエーション的面が強い。一方、里山管理の放棄や里山の造成による宅地化などにより、こうした山菜の自生個体数は減少傾向にある。そこで、その生育状況や環境等を把握することは、山菜の保全や今後の効果的、持続的利用に不可欠と考えられる。

この調査は近畿大学奈良キャンパスで行ったものである。当地は奈良市郊外の矢田丘陵に位置し、キャンパス内には里山が残っているが、かなり放置された状態で、クズ等の特定の植物が優占したり、セイタカアワダチソウなどの外来生物の繁茂も見られる(馬場・岩坪¹⁾)。こうした環境であるが、これまでいくつかの山菜が記録され、また実習などの授業でもこうした山菜の採

取、利用を行ってきた。

日本における山菜として利用できる植物は約1300種と言われており(橋本²⁾)、当キャンパスでもかなりの種類が山菜として利用できるものと思われるが、今回は一般によく利用されている種に限った。なお、山菜の本には、キノコ類も紹介されているものもあり³⁾、本報告でも代表的な食用キノコも含めたが、秋～冬の調査は完全ではなく、今後の調査で追加される種があるものと思われる。

2. 調査方法

①調査地の概要

調査地の近畿大学奈良キャンパス(以下、キャンパス)は、奈良市西方の矢田丘陵に位置し(34°40'N, 135°43'E)、海拔は150m～260m、面積110haである。植生はコナラ、クヌギなどの落葉広葉樹を主体とした近畿地方の典型的な里

山である¹⁾。キャンパス内には里山林のほか、溜池、水田、畑、草地、湿地、沢など比較的、多様な環境から成り立っている⁴⁾。こうした環境から、これまでにレッドリスト生物種は95種記録されている(曾我部・桜谷⁵⁾など)。

②山菜調査

1989年からキャンパス内を随時歩いて、山菜を記録したり、採取した。植栽されている山菜は除外し、自生種のみに限った。なお、山菜の調理方法や保存方法等については、山菜に関する種々の書籍が出版されているので(例えば山口他³⁾、橋本²⁾、山口・木原⁶⁾、武田⁷⁾)、本報告では、詳しくは扱わなかった。

③種の配列と種名

山菜の種の配列と和名、学名は牧野⁸⁾によった。キノコの種の配列と和名、学名は今関他⁹⁾によった。

④写真

主な山菜の写真を図版に示した。写真はすべて、近畿大学奈良キャンパス内で筆者が撮影したもので、原則として利用する部分(果実、若芽など)を示した。

3. 調査結果

①山菜の種類と生態

以下の60種について調査結果を報告する。

種の番号は図版中の番号と一致。

1. クリ(シバグリ)(ブナ科) *Castanea crenata* Sieb. Et Zucc.

落葉高木の野生のクリで、キャンパス内では本数は多くない。果実の熟期は10月で、実(種子)は、栽培種に比べてかなり小さいが、比較的甘くおいしい。ニホンリスなども利用しているようである。また、花(6月上旬)には、アカシジミなどの希少なチョウ類も吸蜜に訪れる。

2. コウゾ(クワ科) *Broussonetia kazinoki* Sieb.

落葉低木で、林縁部に多い。果実は初夏に赤く熟すが、毛が密生していて、食べにくい。甘味もそれほど強くなく、同じ科のクワよりは利用されていない。

3. スイバ(タデ科) *Rumex acetosa* L.

多年生草本で、草地に多数自生しており、特に調整池周辺には多い。茎をかじると、酸味があり、疲れた時には効果がある。

4. イタドリ(タデ科) *Reynoutria japonica* Houtt. Var. *japonica*

多年生草本で、大きい個体は高さ2mくらいになる。草地や林縁部、伐採地跡などに自生する個体が多い。春の若い茎をかじったり、茹でて加工して利用されている。生食では酸味だけであるが、山中で疲れた時には効果的である。

5. アケビ(アケビ科) *Akebia quinata* (Thunb. ex Murry) Decne.

落葉の蔓性木本植物で、林縁部に見られるが、個体数は次のミツバアケビよりはかなり少ない。熟すと果皮は紫色になり、中の果肉は甘く、生食として利用されている。また、果皮も加熱して種々の料理に利用できる。若芽もゆでたりして利用できる。

6. ミツバアケビ(アケビ科) *Akebia trifoliata* (Thunb.) Koidz.

落葉の蔓性木本植物で、林縁部や林内に多く自生しており、個体数は前種よりもかなり多い。果実の熟期は10月上旬から下旬で、キャンパス内でも最も親しまれている山菜の一つである。メジロ等の野鳥もよく利用している。前種同様、果皮や若芽も山菜として利用されるほか、蔓は籠などのクラフトとしても利用されている。

7. ウワミズザクラ(バラ科) *Prunus grayana* Maxim.

野生のサクラの1種で、落葉高木である。里山林内に比較的多く自生している。4月に房状の白い花を多数咲かせる。果実は6月頃に赤から黒く熟し、生食には適さないが、果実酒として利用されている。

8. ウラジロノキ(バラ科) *Sorbus japonica* (Decne.) Hedlund

落葉高木で、キャンパス内では林内に自生するが、個体数はかなり少ない。果実は秋に赤く熟すが、生食には向かないようで、一般には果実酒として利用されているようである。果柄は長く、数

個まとまって付くので、リースの材料として利用するとおもしろい。

9. フユイチゴ (バラ科) *Rubus buergeri* Miq.

蔓性の常緑小低木で、キャンパス内では主に林床に群生している。こうした群生地は10箇所以上知られている。和名のとおり、果実は冬(11月中旬~1月)に赤く熟し、生食できるが、クサイチゴほどは甘くない。ジャムにするとかなりおいしい。積雪下でも果実ができるので、温室不要で冬に収穫できるイチゴとして、栽培化に向けて注目される種でもある。

10. クサイチゴ (バラ科) *Rubus hirsutus* Thunb.

常緑小低木で、キャンパス内では、日当りのよい草地に群生している。こうした群落は、キャンパス内では10箇所ほど確認されている。果実は赤く熟し、他のイチゴより早く、5月上旬から下旬に熟し、生食できる。大変、甘く香りもよく、イチゴ類では最もよく利用されている。栽培化に向け、研究も行なわれつつある。里山の生物資源として注目される。

11. ニガイチゴ (バラ科) *Rubus microphyllus* L. fil.

落葉小低木で、キャンパス内では、モミジイチゴと同様に、林縁部に多く自生している。果実は6月頃に赤く熟し、果実は甘い、核の部分には苦味がある。しかし、生食しても味はよい。よく利用されているイチゴの1種である。

12. モミジイチゴ (バラ科) *Rubus coptophyllus* A. Gray.

落葉小低木で、キャンパス内では主に日当りのよい林縁部に自生している。果実は6月頃、黄色に熟し、甘く生食できる。よく利用されているイチゴの1種である。果実ができた木は翌年には枯れる。

13. カジイチゴ (バラ科) *Rubus trifidus* Thunb.

落葉小低木で、キャンパス内では数本の自生がコナラ林内で確認されている。本種は植栽もされるので、その残存個体の可能性もあるが、毎年、果実をつけている。果実の熟期は6月で、黄色に熟し、甘く生食できる。

14. コジキイチゴ (バラ科) *Rubus sumatranus* Miq.

落葉小低木で、キャンパス内では、伐採跡地に自生しているが、個体数は少ない。果実は7月頃に黄色に熟し、生食できるが、水分が少なく甘味も弱く、あまりおいしくない。夏季に熟すイチゴ類では、熟期が最も遅い。

15. クズ (マメ科) *Pueraria lobata* (Wild.) Ohwi

多年生の蔓状草本で、茎の基部は木質化する。キャンパス内では、日当りのよい場所に自生し、大群落を形成している。特に、造成地斜面は殆ど本種が優占している。根は肥大し、キャンパスでも直径20cmになる個体も記録されている。根から葛粉をつくることことができる。キャンパスでも、葛粉をつくったが、掘りとりは晩秋から冬が適期である。

16. サンショウ (ミカン科) *Zanthoxylum piperitum* (L.) DC

落葉低木で、雌雄異株。キャンパス内ではかなりまれである。若葉は生のまま食用とし、果実は薬用や香料として使用されている。キャンパス内には、幹の直径が7~8cmの本種としては大きな個体があったが、枯死してしまった。幹はすりこぎとしてもよく利用されている。

17. ナワシログミ (グミ科) *Elaeagnus pungens* Thunb.

常緑低木で、キャンパス内では主に林内に自生し、個体数は比較的多い。果実は越年して初夏に赤く熟して、食べられる。

18. ツルグミ (グミ科) *Elaeagnus glabra* Thunb.

蔓性の常緑低木であるが、長さ5~6mに達し、幹の直径が7cmにも達する個体が、キャンパス内でも記録されている。コナラなどの樹木にからみついている個体が確認されているが、個体数は多くない。果実は春に橙色に熟し、食べられるが、あまり利用されていないようである。

19. ヒシ (ヒシ科) *Trapa bispinosa* Roxb. Var. *iinumae* Nakano

池や沼に生える一年生草本で、キャンパス内では調整池に群生する。果実は水面に浮き、中の多

肉子葉の部分が加熱調理して食用にされる。

20. コシアブラ (ウコギ科) *Acanthopanax sciadophylloides* Franch. et Savat.

落葉高木で、キャンパス内では、コナラとともによく自生しているが、次種よりは少ないようである。若葉を山菜として利用される。

21. タカノツメ (ウコギ科) *Evodiopanax innovans* (Sieb. Et Zucc.) Nakai

落葉小高木で、キャンパス内にはかなり多い、コナラ林内に多く見られる。若葉を山菜として利用される。

22. ウド (ウコギ科) *Aralia cordata* Thunb.

多年生草本で、春の若い茎 (主に地下部) が生食や加熱調理される。キャンパス内では、日当りのよい林縁部に自生するが、多くない。

23. タラノキ (ウコギ科) *Aralia elata* (Miq.) Seem.

落葉低木で、キャンパス内では日当りのよい造成地斜面や林縁部に比較的多く見られる。若い芽をタラの芽と呼んで盛んに利用されている。山菜としては最も親しまれている種の一つである。

24. セリ (セリ科) *Oenanthe javanica* (Blume) DC

多年生草本で、キャンパス内では、棚田などに自生している。当地は、以前は棚田が散在しており、本種もかなり自生していたと思われるが、管理放棄とともにほとんど消失したと思われる。しかし、キャンパス内各所での棚田の修復とともに復活したと考えられる。葉茎とも香がよく、よく利用されている。

25. リョウブ (リョウブ科) *Clethra barbinervis* Sieb. Et Zucc.

落葉小高木で、キャンパス内はコナラ等と混じって自生しており、個体数はかなり多い。若芽が食用にされるが、あまり利用されていないようである。

26. ヤマガキ (カキノキ科) *Diospyros kaki* Thunb. ex Murray var. *sylvestris* Makino

落葉高木で、栽培されているカキの野生種である。キャンパス内では、山中の各所に自生しており、胸高直径が数10 cmに達した大木もある。果実は栽培種に比べてかなり小型で、渋いが、干柿にするとおいしい。また、果実は冬季にはメジロ、ツグミなどの野鳥類もかなり摂食しており、野生動物による種子散布が行われているようである。

27. ガマズミ (スイカズラ科) *Viburnum dilatatum* Thunb. ex Murray

落葉低木で、キャンパス内ではあまり多くない。果実は秋に赤く熟し、甘酸っぱく、生食できる。

28. フキ (キク科) *Petasites japonicus* (Sieb. Et Zucc.) Maxim.

多年草で、キャンパス内では、沢沿いに自生しているが、個体数はかなり少ない。若芽は、フキノトウとして利用され、柄は加熱調理してよく利用されている。

29. サルトリイバラ (ユリ科) *Smilax china* L.

蔓性の落葉低木で、キャンパス内では林縁部に自生しているが、個体数は多くない。若芽は、煮たりして利用できる。果実は晩秋に赤く熟すが、食べられない。リースの材料としては好適である。

30. ヤマノイモ (ヤマノイモ科) *Dioscorea japonica* Thunb. ex Murray

多年生の蔓植物で、キャンパス内では、林縁部や藪内に多く自生している。秋にムカゴを採取したり、根 (多肉根) を掘って利用する。山菜としては、かなりよく利用されており、山中の到る所に掘った穴が見られる。

31. スギナ、ツクシ (トクサ科) *Equisetum arvense* L.

多年生草本で、キャンパス内では、主に日当りのよい湿った場所に多く自生している。胞子茎 (ツクシ) は、山菜としてよく利用されている。

32. ゼンマイ (ゼンマイ科) *Osmunda japonica*
Thunb. ex Murray

多年生草本で、キャンパスでは草地や藪内に自生しているが、多くない。若い葉・茎をよく利用される。

33. ワラビ (イノモトソウ科、ワラビ科)
Pteridium aquilinum (L.) Kuhn var.
latiusculum (Desv.) Und.

多年生草本で、キャンパス内では、日当りのよい造成地斜面に群生している。若葉はよく利用され、採取者も多い。

34. マツオウジ (ヒラタケ科) *Lentinus lepideus*
(Fr.:Fr.) Fr.

キャンパス内では針葉樹が多くある混生林の倒木に10個体ほど発生し、松やにの様なにおいがある。晩春から初夏にかけて見られ、大きさは径5~25cmほどにもなる。

35. アカヤマタケ (ヌメリガサ科) *Hygrocybe conica* (Scop.:Fr.) Kummer

キャンパス内の湿った草地に散在して発生し、夏に見られる。傘の表面が湿っているとき粘性があり、手で触れるまたは老成すると黒く変色する。

36. ワカクサタケ (ヌメリガサ科) *Hygrocybe psittacina* (Schaeff.:Fr.) Wünsche

キャンパス内の湿ったコケ上や草地に発生し、夏に見られる。傘の表面が湿っているとき粘性があり、幼菌の時は鮮やかな緑色だが、乾いたり老成したりすると黄色くなる。

37. ウラムラサキ (キシメジ科) *Laccaria amethystea* (Bull.) Murr.

キャンパス内では混生林のやや乾いた地上に数本発生し、夏に見られる。全体が紫色で傘の大きさが径1.5~4cmほどである。風味に癖がなく、食べると歯切れがよいようである。

38. ムラサキシメジ (キシメジ科) *Lepista nuda*
(Bull.:Fr.) Cooke

キャンパス内では混生林の地上で、きれいな菌輪をえがいて晩秋頃に発生し、広く食用にされて

いる。

39. モリノカレバタケ (キシメジ科) *Collybia dryophila* (Bull.:Fr.) Kummer

キャンパス内では初夏から秋にかけて見られ、混生林や松林の落葉上にいたるところで群生して発生する。傘の色は淡黄土色やクリーム色など様々で、群集で発生する。風味は栽培品のエノキタケに似ている。

40. エノキタケ (キシメジ科) *Flammulina velutipes* (Curt.:Fr.) Sing.

キャンパス内では広葉樹の枯れ木や切り株に多数発生する。これまでに観察された、寄生樹木はエノキ、コウゾ、アカメガシワである。晩秋から春にかけて見られる。ぬめりが強く、甘い香りがある。

41. ウラベニガサ (ウラベニガサ科) *Pluteus atricapillus* (Batsch) Fayod

キャンパス内では混生林にあるコナラなどの広葉樹の倒木や枯れ木に発生し、名前の通りひだは肉色であるが、幼菌の時は白色である。春から初夏にかけて見られる。食べると少し水っぽい。

42. ヒトヨタケ (ヒトヨタケ科) *Coprinus atramentarius* (Bull.:Fr.) Fr.

初夏から秋にかけてキャンパス内では混生林の地上に発生する。数本が群生している。幼菌が食用となり、老成すると一晩で溶けてしまう。

43. イタチタケ (ヒトヨタケ科) *Psathrella candolliana* (Fr.:Fr.) Maire

キャンパス内では混生林にある倒木や地上に発生し、初夏から秋にかけて見られる。傘の縁に白色の被膜が付着していることが特徴で、幼菌の時は淡黄褐色であり老成するにつれて色が抜けていく。

44. クリタケ (モエギタケ科) *Naematoloma sublateritium* (Fr.) Karst.

キャンパス内では秋に広葉樹の倒木や枯れ木に発生する。わずかに苦味があるが広く利用されている。

45. キイロイグチ (イグチ科) *Pulveroboletus ravenelii* (Berk.et Curt.) Murr

キャンパス内では混生林の地上に発生し、夏から秋にかけて見られる。全体が鮮やかなレモン色であり、湿るとやや粘性を持つ。

46. ヤマドリタケモドキ (イグチ科) *Boletus reticulatus* Schaeff.

キャンパス内では混生林や竹林の地上に発生し、夏から秋にかけて見られる。幼菌の時の管孔は初め白色だが、黄色からオリーブ色になる。湿っているとやや粘性がある。傘の肉は厚く、香りは弱い。

47. アカヤマドリ (イグチ科) *Leccinum extremiorientale* (L.Vass.) Sing.

キャンパス内では混生林の地上で夏に見られる。老成するにつれて傘のしわがひび割れていき、淡黄色の肉が見えてくる。傘は柔らかいが柄はややかたい。

48. オニイグチモドキ (オニイグチ科) *Strobilomyces confusus* Sing.

キャンパス内では混生林にあるコナラなどの広葉樹の根元付近で発生し、夏に見られる。幼菌の時の管孔は白く、老成すると黒くなる。幼菌の方がおいしいようである。

49. キクバナイグチ (オニイグチ科) *Boletellus emodensis* (Berk.) Sing.

キャンパス内では混生林の根際に発生し、夏に見られる。これまでに観察された樹木では、スギの根際で見ついている。管孔は黄色であり、手で触れると青く変色するところが特徴である。

50. アカハツ (ベニタケ科) *Lactarius hatsudake* Tanaka

キャンパス内ではアカマツ林の根元付近に発生し、初夏から秋にかけて見られる。傷つけると橙色の乳液を発生させ、老成すると青く変色する。

51. ベニナギナタタケ (シロソウメンタケ科) *Clavulinopsis miyabeana* (S.Ito) S.Ito

キャンパス内では竹林の地上に発生し、夏に見られる。

52. ノウタケ (ホコリタケ科) *Calvatia craniiformis* (Schw.) Fr.

キャンパス内では夏に混生林の地上で見られる。幼菌は白く、老成すると褐色となる。食用となるのは未成熟な幼菌時だけである。

53. ホコリタケ (ホコリタケ科) *Lycoperdon perlatum* Pers.: Pers.

キャンパス内では混生林の地上に多くみられ、春から秋にかけて発生している。ノウタケと同じく肉が白い幼菌時のみ食用となり、少しでも着色していると食用に適さない。

54. キヌガサタケ (スッポンタケ科) *Dictyophora indusiata* (Vent.: Pers.) Fisch.

梅雨期と秋にキャンパス内では竹林で発生している。伸長速度は速いが、伸び終わると半日ほどで委縮して倒れてしまう。

55. ハナビラニカワタケ (シロキクラゲ科) *Tremella foliacea* Pers.: Fr.

キャンパス内では混生林にある広葉樹の倒木や枯れ木に、晩春頃発生する。これまでに観察された寄生樹木はコナラだけである。乾くと小さくなるが、水に入れるとある程度戻る。逆に雨が続きと少しずつ溶けて形が崩れる。

56. シロキクラゲ (シロキクラゲ科) *Tremella fuciformis* Berk.

春にキャンパス内の混生林にある広葉樹の倒木に発生する。これまでに観察された寄生樹木は、コナラだけである。乾くとかたい軟骨質となる。

57. アラゲキクラゲ (キクラゲ科) *Auricularia polytricha* (Mont.) Sacc.

春から夏にかけてキャンパス内の混生林で枯れ木や倒木に発生する。背面は極小の毛に覆われ、キクラゲよりもかたくコリコリとした食感。キャンパス内の樹木ではムラサキシキブとコナラに寄生している。

58. キクラゲ (キクラゲ科) *Auricularia auricula* (Hook.) Underw.

春から夏にかけて混生林にある枯れ木や倒木に多く発生する。観察された寄生樹木の多くはリョ

ウブだが、コナラにも見られた。ゼラチン質で黄褐色、コリコリとした食感。

59. ヒメキクラゲ (ヒメキクラゲ科) *Exidia glandulosa* Fr.

小さな球状のものが多数生じ、一つの塊となっている。ゼラチン質で黒色。キャンパス内では混生林の枯れた木の上に広がっている。これまで観察された寄生樹木は、リョウブ、コナラである。

60. ノボリリュウタケ (ノボリリュウタケ科) *Helvella crispa* (Scop.) Fr.

キャンパス内の混生林に見られる。梅雨の時期に湿った地上から発生する。風味には全く癖がなく、歯切れの感触が良いようだ。

② 生育環境別種類 (表 1、表 2)

キャンパスにおける山菜類の生育環境をここでは次の6つに分けた。

①草地、②林縁、③林内、④水辺、⑤松林、⑥竹林

- ①草地：日当たりのよい丈の低いヨモギ・スイバ群落など。
- ②林縁：草地と広葉樹林等との境界部分。
- ③林内：主として落葉広葉樹木内とその樹冠部。
- ④水辺：溜池や水田など。
- ⑤松林 (きのこの生育環境)：20年生くらいのアカマツを主体とする林。
- ⑥竹林 (きのこの生育環境)：モウソウチクを主体とする竹林。

山菜にはいくつかの環境に出現するものもあるが、ここでは、もっとも多く見られる1種類の環境に含めた。

草地は日当たりがよく、クズやワラビなどの生育が多く見られた。林縁部はキイチゴ類やヤマノイモ、アケビ等最も多くの種の山菜が生育していた。林内はそれ自体で森林を形成するリョウブやヤマガキ、ウラジロノキなど比較的多くの種が認められた。水辺は溜池や水田を指し、ヒシとセリがあげられる。こうした環境別では林縁部が有意に多くの山菜の種が生育していた (表 1)。

きのこ類は林内で有意に種数が多かった (表 2)。

表 1. 生育環境と山菜 (緑色植物) の種数

	草地	林縁	林内	水辺
種数	7	13	11	2

$\chi^2 = 8.576^*$

表 2. 生育環境とキノコの種数

	草地	松林	林内	竹林
種数	3	4	20	4

$\chi^2 = 25.903^{**}$

③ 季節別山菜の種数 (表 3)

山菜の季節別利用種数は有意に春に最も多く、次いで秋で、夏と冬はかなり少なかった。

キノコの数については、秋と冬の調査が不十分のため、不明である。

表 3. 利用・収穫季節別種数 (キノコを除く山菜)

	春	夏	秋	冬
種数	20	3	9	1

$\chi^2 = 26.515^{***}$

4. 考 察

比較的よく利用される、山菜として緑色植物 33 種、キノコ類 27 種取り上げたが、この他にもかなりの種が利用できるものと思われる。キイチゴ類のように生食できるものや、加熱調理して利用するものなど、利用形態は種々であるが、遺伝資源としての利用の可能性をもった種も少なくないと思われる。例えば、フユイチゴは野生で冬に果実が熟すが、こうした、形質 (遺伝子) を活用することによって、加温 (人工的エネルギー) なしで、冬に収穫できるイチゴの作出も考えられる。また、クサイチゴは市販のオレンジイチゴ等よりもかなり甘味が強いので、栽培化を検討する価値があるように思われる。

キャンパス内における山菜の生育環境は、林縁部に生育する山菜が最も多く、キイチゴ類やアケビ類、ヤマノイモなど多様である。こうした現象は、例えばチョウ類群集が林縁で豊富¹⁰⁾になる例と同様であり、里山における林縁は生物多様性に重要であることが、この例からも示唆される。次いで林内が多く、これはそれ自体が森林を形成しているリョウブやクリ等が含まれているためであるが、林床に生育するフユイチゴ等の山菜も記

録された。一方、水辺では、溜池のヒシや水田のセリが見られた。キノコ類も調査はまだ不十分ではあるが、種々の環境に生育しており、特に里山林内に多かった。すなわち、山菜やキノコ類は里山のこうした種々の環境に生育しており、これが、山菜類の多様性を保っていることがわかった。

山菜を利用する季節は、やはり春と秋が多かった。これは、若芽の季節と果実の熟す時期にあたっており、日本の里山で、人々がよく活動する季節に一致しているとも言える。

5. 謝 辞

本研究の遂行や原稿作成でご協力頂きました本学部環境管理学科の高見晋一 元教授と同ジン・タナンゴナン講師に深謝します。また、種々、ご協力を頂きました環境管理学科環境生態学研究室の皆さんにも感謝します。

6. 引用文献

- 1) 馬場生織・岩坪五郎 (2001) 近畿大学奈良キャンパスの現存植生に関する生態学的研究. 近畿大学農学部紀要. 第 34 号. 113-149.
- 2) 橋本郁三 (2001) 信州発全国版 木の実・山菜事典 1 木本・シダ編. ほおずき書籍. 318pp.
- 3) 山口昭彦・木原 浩・平野隆久 (1983) 山の幸 山菜・木の実・きのこ. 山と溪谷社. 304pp.
- 4) 桜谷保之 (1999) 近畿大学奈良キャンパスの生態系の概観. 近畿大学農学部紀要. 第 32 号. 69-78.
- 5) 曾我部陽子・桜谷保之 (2009) 近畿大学奈良キャンパスにおけるレッドリスト植物の生育状況. 近畿大学農学部紀要. 第 42 号. 3-9.
- 6) 山口昭彦・木原 浩 (1976) 野外ハンドブック・1 山菜. 山と溪谷社. 255pp.
- 7) 武田良平 (2000) ポケットガイド 7 山菜・木の実. 小学館. 351pp.
- 8) 牧野富太郎 (小野幹雄・大場秀章・西田誠: 改定増補編集) (1989) 改訂増補 牧野新日本植物図鑑. 北隆館. 1453pp.
- 9) 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (1988) 山溪カラー名鑑 日本のきのこ. 山と溪谷社. 383pp.
- 10) 東條達哉・桜谷保之 (2008) 里山林を含む大学キャンパスにおけるチョウ類群集の環境選択性 環動昆. 19 (1) .17-29.



1. クリ



2. コウゾ



3. スイバ



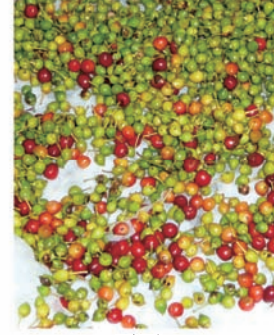
4. イタドリ



5. アケビ



6. ミツバアケビ



7. ウワミズザクラ



8. ウラジロノキ



9. フユイチゴ



10. クサイイチゴ



11. ニガイイチゴ



12. モミジイチゴ



13. カジイチゴ



14. コジキイチゴ



15. クズ



16. サンショウ



17. ナワシログミ



18. ツルグミ



19. ヒシ



20. コシアブラ

図版1. 近畿大学奈良キャンパスにおける山菜類 (番号は本文に種の解説文の番号と一致)



21. タカノツメ



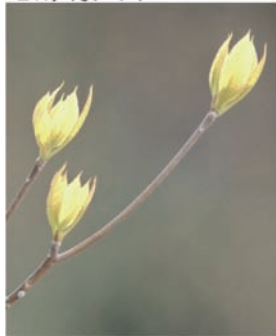
22. ウド



23. タラノキ



24. セリ



25. リョウブ



26. ヤマガキ



27. ガマズミ



28. フキノトウ



29. サルトリイバラ



30. ヤマノイモ



31. スギナ(ツクシ)



32. ゼンマイ



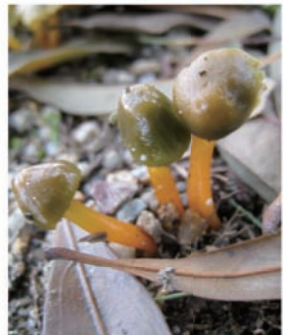
33. ワラビ



34. マツオウジ



35. アカヤマタケ



36. ワカクサタケ



37. ウラムラサキ



38. ムラサキシメジ



39. モリノカレバタケ



40. エノキタケ

図版2. 近畿大学奈良キャンパスにおける山菜類 (番号は本文の種の解説文の番号と一致)



41. ウラベニガサ



42. ヒトヨタケ



43. イタチタケ



44. クリタケ



45. キイロイグチ



46. ヤマドリタケモドキ



47. アカヤマドリ



48. オニイグチモドキ



49. キクバナイグチ



50. アカハツ



51. ベニナギナタケ



52. ノウタケ



53. ホコリタケ



54. キヌガサタケ



55. ハナビラニカワタケ



56. シロキクラゲ



57. アラゲキクラゲ



58. キクラゲ



59. ヒメキクラゲ



60. ノボリリュウタケ